

## 館山平野中央部における沖積層の堆積環境と段丘形成時期について

## Depositional environment and Holocene terrace formation in the central part of Tateyama Plain, Boso Peninsula

# 大里 重人 [1]; 石綿 しげ子 [2]; 鈴木 茂 [3]; 久保 崇 [4]; 遠藤 邦彦 [4]

# Shigeto Osato[1]; Shigeko Ishiwata[2]; Shigeru Suzuki[3]; Takashi Kubo[4]; Kunihiko Endo[4]

[1] 土質 R; [2] 基礎地盤; [3] パレオ・ラボ; [4] 日本大学

[1] Doshitsu R; [2] Kisojiban; [3] Paleolabo Co., Ltd.; [4] Nihon Univ.

房総半島南部の館山平野には、海水準変動とあわせて地殻変動に伴い突発的に形成された段丘がみられるが、段丘の形成過程は単純ではない。館山平野中央部に位置する館山市萱野新橋付近の滝川沿いで、有楽町海進最盛期の堆積物と、これら海成層を削剥する河成段丘堆積物等を確認したので報告する。また、この地域には縄文中期～平安期の遺跡があり、遺跡分布や遺跡の時代を加味して当時の堆積環境や段丘形成時期の検討を行う。

### 1. 堆積物の特徴と堆積時期

滝川沿い萱野新橋付近の左岸露頭は、河床から標高 (TP)+11m 以上まで続く海成砂層と下位の泥層で構成される。それぞれの堆積物の年代は、砂層直下の TP+5.0m 前後の泥層で 5230yBP14C 年代 (八ボウキガイ合弁)3)、TP+7.2 m の泥質砂層では 5210yBP14C 年代 (5640ca.yBP)(ウラカガミ合弁)4) が得られている。

泥層は均質で、水深 10m より深い内湾域に生息する合弁のウラカガミや八ボウキガイ科などが多産する。泥層中の貝化石は、合弁立位状態のものがほとんどで、上下逆転しているものもある。このことより泥層中の化石群は、鎌滝ほか (2005) 2) で指摘されている「急速埋没イベント応答型化石群」に相当すると考えられる。この泥層の直上には津波堆積物である可能性が高い厚さ数十センチの砂層を伴う。

上位のやや泥質な砂層は平行ラミナが発達し、合弁のウラカガミやマテガイ、破片状のキヌタアゲマキ、スダレガイ、八ボウキガイ科の他ヤカドツノガイなどが多く、潮下帯～上部浅海帯の貝化石が混在する。これらから貝化石群は、ストームもしくは鎌滝ほか (2005) 2) の「イベント時掃き寄せ型化石群」と考えられる。

### 2. 段丘の形成期について

萱野新橋付近の地形は、南北に伸びる砂堤部海側に比高 7m～10m 程度の段丘崖をもつ標高 17 m 前後の海成段丘面である。館山平野中央部一帯に広く分布する面の一部である。前述した萱野新橋付近の左岸の露頭は、標高+17m 前後の砂堤部に接し、最高海面期の堆積物で構成されている。砂堤部の離水時期は、堆積物の年代及び遺跡の分布から 5210yBP(5640ca.yBP)-4000yBP(4545ca.yBP) の間である。4)6)8)

この砂堤部の面を削って TP+14m, TP+12m, TP+10m, TP+8m, TP+5m の狭い 5 段の河成段丘が形成されている。このうち砂堤部陸側に発達する TP+14m 程度の段丘上には萱野遺跡 6) がある。この遺跡には縄文中期の遺物が河成砂層の上に載っており 4)、すなわち 4000yBP(4545ca.yBP) より以前に段丘化したと考えられる。

また新橋近傍の滝川左岸高水敷 (TP+5m) に露出する砂礫層は津波堆積物の可能性がある。この砂礫層は上流へ流向するフォアセットを示し、前述した 5210yBP14C 年代 (5640ca.yBP) の泥層を削り込みさらに礫層中に破片状の土器を包含する。土器は磨耗が少なく、形態から 6～7 世紀 (古墳期～白鳳期) の遺物 (土師器、須恵器) あるいは弥生期と推定される。礫層下には焼土の可能性のある桃色変色土がみられる。

### 3. 今後の課題

- ・平野を構成する段丘は、海成と河成両方が複雑に分布しているため、河岸段丘も合わせて検討しておく必要がある。
- ・石田ほか (2001) 7) による縄文海進最盛期の旧汀線地形とその年代との比較を行い、地形発達史を再検討する必要がある。

- ・平久里川や滝川は下刻流路の中に津波が遡上する可能性がある。このため遺物を包含する砂礫層を含め河道周辺の堆積物を精査する必要がある。

### 引用・参考文献

- 1) 藤原ほか (1997), 第四紀研究, 36(2), 73-86
- 2) 鎌滝孝信ほか (2005), 日本第四紀学会講演要旨集, 35, 30-31
- 3) 熊木 (1981), 第四紀研究, 20-4, 325-327
- 4) 大里ほか (2005), 地質学会第 112 回学術大会講演要旨 P 328
- 5) 中田ほか (1980), 地理学評論, 53-1, 29-44
- 6) (財) 千葉県文化財センター (2004), 千葉県文化財センター年報 No.28, 35-38
- 7) 石田ほか (2002), 国立環境研報告 170, 75-80
- 8) 谷口康浩 (2001) 季刊考古学, 77